

第2回

協働学習企画入門

取材 & 事例集

< 協働学習企画ケース >

< eポートフォリオ学習の指導 >

< eコミュニティ訪問 >

< フリートーク / 生涯学習に届けたい声 >

< 県の生涯学習企画担当は語る >

エコウォーク in 手賀



杉浦正吾さん（環境カウンセラー）

2001年、千葉県沼南町の環境学習イベント「エコウォーク in 手賀」で、学習チームがゴミ拾いなどしながらカメラで撮った環境の記録画像集を全てネットに公開した。

イベント後も参加した人たちからコメントをもらったり、タイトルを付けたりしながら、行政・市民・学校が連携して、環境学習の記録を共有する協働学習の試みを先駆けた。

エコウォークはですね、沼南町の役場の方がネットワークまちづくり課という課を、新しく立ち上げて、生涯学習審議委員というのを町から募った訳ですね。子供から、お年を召した方まで、目的意識を持って、ずっと豊かに暮らせるような町づくりをしようというような発想で、みんなで色々話し合ってきて…。最初は町の方から出た話です。ですが、主体は「まちづくり研究会」みたいな会があってですね。市民の代表です。まちづくり研究会と地域の方々と学校と三位一体でプロジェクトを進めてきたというのが最終形ですね。

あれは、PopCornを当時紹介いただいて。結局その環境問題と言うか環境学習の中で、表に出てですね、情報として写真を撮るなりなんなりという方法がありますけど、一つもその拾った情報を削除しないと。全てを載せられると言う所がまず一つ面白いなという気がして。かつ削除しないで持ってきた画像をですね、その時でもいいし、遅れてからでもいいですし、コメントをつけていくと、というような事が出来る。アーカイブをしておいて、後で思い出して語る事も出来るし、アーカイブが割と簡単に自由に行ける。その二点で、環境学習には結構向いてるのかなと。

あの試み自体は、教頭先生の全国の会議というのがあるらしくて、そこでは高く評価されたというふうに、手賀中の教頭先生がおっしゃられていて、「よくここまでできたね」と…。



みんなから寄せられたコメントは下の画像をクリックすると見られるよ。

みんなが撮った写真



今また、同じノウハウでやれば、今度は割と、子供たちとか、学校の先生たちが自分たちが作る。それこそ、今時代がNPOとかNGO地域の市民の方々の協力が得やすくなっていますから。その中から優秀な方を募ってもいいでしょうし。

今もう割と総合学習というのは、高校でも必修化されて、あたりまえのように授業の中に入ってきた訳ですね。そうすると環境学習だけでなく総合学習のノウハウが蓄積されてると思うんで。それを当時やったノウハウにつっこむと、面白いものができるような気がしますね。

地域文化の資料館作り ~ 山形県西川町 ~



松田憲州さん（西川町教育文化課主任）

文化財などの調査資料を出版するには編集の手間も費用もかかる。

PushCornを知った生涯学習担当の松田憲州さんは、調査資料のデジタルアーカイブ化を思い立った。ホームページの制作経験は全く皆無のメンバー3人が簡単な指導を受けた後、いきなり制作を始め、わずか1ヶ月の間に千ページ近いサイトを作り上げた。最終的に約2千ページの規模になった。

平成16年度は「山菜学」に取り組んでいる。

西川町石碑石仏資料

そもそのスタートは平成元年頃に、町の事業に関わっている若い方が、石仏の調査を個人でやっておられて、その方が調査されて来られたものをベースにして、一昨年から町の緊急雇用対策事業として調査を始めてきたということです。

どうしてそういうものを公開しているということになりますと、やはり石碑とか石仏というのは、地元の方でも、その由来とかどういった経緯で存在しているのかっていうのがわからなくなっているような状況にあるのですけれども、やはり昔の信仰の対象でありますから、先人たちが非常に苦労して建てた思いとか、込めている願いとかいうものを、今の世の中の方にも少しでもわかっていただいて、石仏を理解していただくということで、ひいては西川町の歴史も見えてくる。

あとは集落にあっては集落自体の昔の歴史もわかってくるということ、地域に関心とか興味とか、より一層深まるのではないかとことを思いましてホームページを開設しているところです。



西川町の山菜料理

西川町の月岡という集落で、風明(ふうみょう)会というお母さんたちの手作りの食品を作る会があるわけですね。そこで、笹巻を作っている状況です。笹巻を茹でる時にはこうやって持ち上げる、なんていうのは見ないとわからないわけですね。

「山菜学」の関連のホームページということで、今年になってからですが、西川町の郷土食、郷土料理の調査を新たにやってみました。

国文祭やまがた 2003 情報レポーター

2003年10月、山形県で国民文化祭が開かれた。この「国文祭やまがた」をサポートするボランティアチームの事務局を担当された海谷さんが、国文祭のイベントばかりでなく、ボランティアの活動の様子から研修会の様子まで含めて、ボランティアの力で記録したいと構想したのがそもそもの始まり。市民参加型ネット「やまがたネット」(代表：堀清人さん)の支援体制で有志を募り、10数名の情報レポーター志望者が集まった。メンバーの大半がシニア層。数回の研修を経て、いきなり国文祭本番の取材活動に入った。いざ本番になると待ったなし。手分けしてイベントなどをレポートしたページが日々何件もネットに公開され続け、かれこれ千点近いデジカメ画像、ビデオクリップが情報レポーターの解説と共に掲載される巨大サイトが出来あがった。

最初は機材を操る様もたどどしく、自ら取材することを躊躇していたメンバーが10日間の期間中、みるみる逞しく成長を遂げた。



海谷美樹さん(山形県山形市、元国文祭やまがた事務局)

国文祭というのは単発のイベントで、10日間が終わってしまえば後は何も残らなくなるんですけども、それまでの期間というのがすごく重要だと思ったんですね。その中で人の出会いとかを、国文祭が終わってからもずっと続けていけるような、そういった人の関わりっていうのを作っていきたいと思ってましたので、記録っていう部分を情報レポーターとして、一つの集団というか、志を持つメンバーの集まりということで、継続して活動できるような形にしていきたいな、というのがありました。

デジカメ持ってらっしゃる方には、写真画像ということでアップしていただいたんですけども、ビデオを持ってらっしゃる方には、動画の形でPushCornを使ってアップしていただいて、それをインターネット上で公開していきました。



高橋敬二さん(山形県山形市)

私も情報レポーターになって、ビデオカメラを買った。そして何とかそれで撮った…。もともとそういう趣味があっただけで、こう仲間に入ってみると、自然と友達ができるわけですね。私の商売上、何というか、おなじような職人のつきあいだったのが、まあ、若い人で、いろんな変わった人もいるわけだからね。それで面白い。そしてたまには一杯飲むということ

で、だんだん深みにはまったという変だけれども…。



学校でeポートフォリオ～東根市立高崎小～



鈴木伸治さん（東根市立高崎小学校教諭）

授業の実際を伝えるには言葉だけでは不十分である。写真やビデオ映像があって初めて他者に理解してもらえるものとなる。しかし、ホームページ作成ソフトを用いるとページ制作に時間がかかり、多忙な状況の中で、そのために時間を割いて対応していくことは難しいと考えていた。(略)早速、これ(PushCorn)を授業の実践記録に役立てることを考えたのが、「eポートフォリオ」実践の始まりである。(鈴木伸治)
(月刊『視聴覚教育』2004年7月号から)

「初めに教えることがありき」ではなくて、自分たちが疑問に思ったことを自分たちで解決していこうというふうなところです。

子どもたちが全部企画しています。子どもたちと一緒に作っていくような感じで、基本的には子どもたちが主体ということで授業を進めています。

ポートフォリオをお互いに見せ合うことによって、「こういうところがいいね」とかいうように他の人のいいところに気づいて、更に自分の意見も認められたなんてなれば、最高に嬉しいだろうし、学習が凄く充実したものになる。

こういうのがあれば、私たち指導者としても、この子はこういうふうな考え方をしている、今度は友達のいいところを取り入れたってということは、成長が見られるわけですよね。その成長のところ、評価できていけるだろうと。そこが一番いいところではないかなと思います。

子供たちに本当につけさせたい力とは何かというふうに分で捉えた時に、もちろん教科独自の内容というか。あと、そこに意欲がないとそれとうまく関連していかないのだろうと。そればかりやっていると途中で飽きてしまうし、挫折してしまうし、ということが起きてしまう。自分がやりたいことがあって、そのやりたいことを到達していくためにそのスキルがうまく融合されたときに、はじめてそのスキルの意味も出てくるし、私たちが狙っている、自分たちから進んでやるといったところの力も伸びていくし、ということで。どちらも重視しながら、総合的に高めていければいいかなって思っています。



海野丈芳さん（東根市立高崎小学校校長）

(ポートフォリオ学習は)子どもが一番見えてくる方法だろうと思っています。また、私たちの指導の方向ということ、それから中身といいますかね。そういうのがより明確に見えてきて、子供が見えて、教材も見えて、指導の方向性も見えるという非常に有効なやり方ではないかと捉えています。

簡単に言うとスパイラル(らせん状に上昇する)に続いていくというふうに分で捉えていい。子どもたち自身が積みあがっていくことが自覚できる。

チャレンジキッズ



太田容次さん

(滋賀大学教育学部附属養護学校教諭)

チャレンジキッズ研究会は、障害のある子どもたちが、「学びの共同体」を育てていくことを研究し支援する養護学校の先生方の全国横断の研究会である。2004年は愛媛にメンバーが集まった。

滋賀の養護学校では、2003年に学内にPushCornサーバを構築し、太田さんたちが子どもの「eポートフォリオ学習」の実践に取り組んできた。

ここは、愛媛大学附属養護学校です。チャレンジキッズ研究会のメンバーが全国から集まっています。

ここで、「eポートフォリオ」について養護学校であるとか、地域の特殊学級などで使われている。もしくはこれから使っていく上でどうかということで、チャレンジキッズ研究会で試しにいくつか使ってみた話を元に、みんなで考えてみたいと思います。

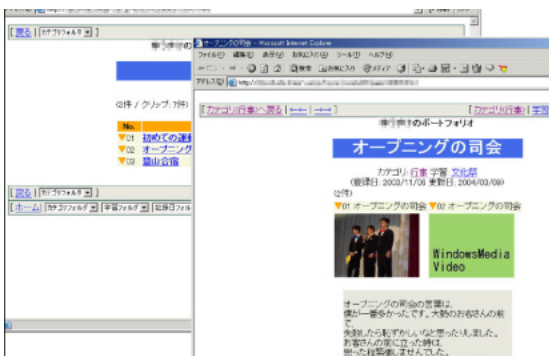
まず最初に私、昨年度（平成15年度）の取り組みとして総合的な学習の時間に、子どもたちが実体験した事を、日頃、日記とか作文とかで、しかも、振り返りの材料としては、カメラで撮った動画をテレビで一斉に見る。こういったプロジェクターなんかを使って一斉に見て、それを元に振り返って作文にするというような取り組みとをずっと続けてるわけですけど。

それとデジカメで撮った静止画、それからビデオで撮ったビデオクリップに初め生成しておいた、ファイルサーバに置いて、自分が好きなように振り返りながら、自分の好きなデータを組み合わせながら。そしてさらに、数行の感想を組み合わせる、みたいな取り組みをしました。

そうすると、これまで、例えば運動会であるとか文化祭であるとか、全く作文の書き出しに20分かかって、1行書いて鉛筆で消して、40分の授業終わったら結局2行ぐらいしか書いてへんかったような子どもが、自分のペースで、自分の目線で振り返り、さらに、それを自分の中でPushCornを使って、振り返っていく中で、あっという間にWebページを仕上げた。担任と課題別学習を担当する教員はそれを見て非常に驚いて。その違いはなんだろうなということ。昨年度から研究の観点からまとめてみたんですけども。

学習活動で（PushCornを）使う部分を限定する事によってほとんどの子供が使えましたね。軽度の子供たちについては。

むしろ出来上がりの完成度の高さで、また後から振り返りに使ってみても、前残った。例えばある障害持ってる子の感想として面白かったのが、「自分は忘れる事がかなわんから、ずっと日記を書いたりメモしたりしている。でもメモしたものがどっかいくねん僕は。でもこれが、こういうふうに溜まっていると、いつどんなことをやって、どんなふう思ったか、振り返れて、それが非常にいい」みたいな感想だったんです。



紙と鉛筆では自己表現が難しかった子どもが PushCornを使ったら豊かな表現をするのに驚いた

子どもを育む教育のアイデア



杉浦正吾さん（環境カウンセラー）

杉浦さんには環境学習イベント「エコウォーク in 手賀」の話に続き、学校でITを活用した協働学習がどんな具合に展開できるか、アイデアをお聞きした。

（聞き手：前川道博）

---- 今は、いくつかこう、条件がだいぶ変わった、一つはもうデジカメがかなり普及した、

杉浦 しかも今、デジビデ、というか動画ですよ。動画のクリッピングというのですか。まだ私はそこまであまり体感した事がないですけども、話にはうかがってます

ね。それは本当にそうなってくればすごいなと思いますね。そういう時代なんでしょうねもう。

---- エコウォークで写ルンですで撮ってた。あれがまずデジカメに変わりうるんでしょうけど、加えてビデオで撮って来る。デジカメだと選んで撮って来る、デジカメだと選んでパシャパシャと、それはそれで選んだ事に意味があるんでしょうけれども。

杉浦 ビデオで撮る良さというのは、静止画は意図的に撮るわけですよ、ですがその動画は意図しない何か、事件が起こる訳ですね。その事件というのは「トンボが飛んでくる」でもいいんですけども。そういう突発的な面白さというかな。動画の良さですよ。それはまた後で編集してもいいです。

文科省の制度で、学校評議委員制度というのがあって、去年からとある評議委員やってるんですけども。そこで、校長先生と話してた中で。子供の職場体験というのを非常に重んじてるんですね。教科学習だけじゃなくて、キャリア学習というか。自分が将来どういう風に進むのかとかみたいな。子供達今、自分の進む指針とか夢とかが持てないとかねいわれてて。

それもう、自分の体験できる業種が限られるわけで。なんでもいいですけど。お寿司屋さんに行ったら、お寿司屋さんの体験しかできないわけですね。

ところが、デジビとかデジカメでもいいですけど、持って行ってそれこそ3人1チームで持って行って、そこで撮って戻ってくれば、10、20の業態に各子供たちが行けば、20業種のひとつの、子供たちが見て将来考えるような、一大教材が出来る訳で、なんでも出来るなという気はしますね、私が先生だったらこれやりたいですね。君たち行っただけじゃなくて、君たちの体験を君たちの言葉で語るのもこれもよし、だけど、それをみんなに伝える、みんなで共有するみたいなね。それもまたデジタル化のいいところじゃないですか。

---- 情報レポーターというのだろうか。自分で伝える言葉を発する。これやるとすごくいいんだよね。表現するという事を、半ば強制的にやらせるんじゃなくて、こう引き出させるという。その意味がとても大きくて、その経験値がないと表現する幅も変わって来る、発見する質も変わって来るんですよ。意図的にそういうふうにするといい。

杉浦 本当、子供たちに任せちゃってね。後はもう勝手にやらせる。ビデオの使い方だけ教えてね。

---- 「最後にコメントつけるよー」とか言って。

杉浦 十分だと思いますね。これを数年間続けたら、その学校のライブラリができてですね、まあインターネット上でもいんでしょうけど。興味がある、よくわかんないですけど、まあ3年も4年もつづればかなりのライブラリが出来るでしょうから。おもしろいですよね。

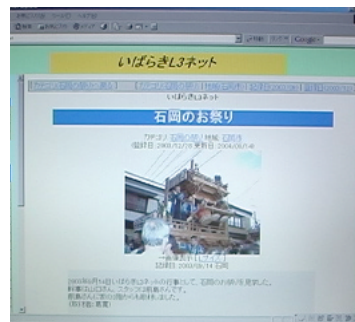
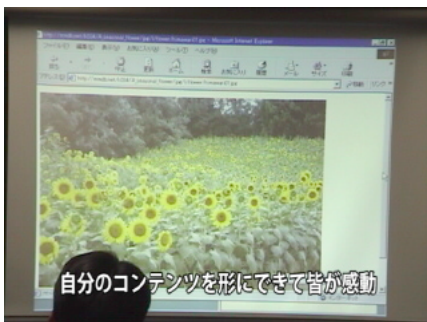
---- そうですね、出来たらいいなという事ですね。

杉浦 そうですね。それはでも、進路指導にも役に立ちますから、実質もあると思いますね。先生方にとっては、

---- それもうやろうと思えば出来ますね。先生の、後は問題。やれる、やると思えば...

杉浦 意思の問題ですね。

いばらきL3ネット



2002年11月、放送大学茨城学習センターのパソコンクラブ「AirPC」で「PushCornワークショップ」を開いたのがそもそものきっかけ。2003年3月、協働学習「勘十郎堀探訪」を機会に生涯学習のグループ「いばらきL3ネット」ができた。同年9月に協働学習「石岡の歴史探訪」(石岡のおまつり)をした。



石川慎二さん

(茨城県水戸市、いばらきL3ネット会長)

eコミュニティは異分野交流の面白さ

いろんな価値観のある人がいてね。本当に面白いですね。というのはね。例えば、こう、歴史が好きの人、経済が好きの人、いろいろいますよね。それだけで終わっちゃうんです。それで。

何かあるものが、何か蓄積されて、もしかするとそれが財産...ね。財産になって残っていく。それからいろんな人がそれを見てどうだこうだと...

歴史探訪のヒント

新道を走らないで旧道があるところは旧道をなるべく車で走っ

てみると。そうすると昔の面影がね。街道筋、宿場にありますがね。

地域地域にテーマ、水戸なら天狗党

新撰組よりも天狗党の考え方の方が、今の日本に対する影響から考えたら、あれの方が大きいんじゃないかと。我々はもっと地元としては天狗党に関して言えば、かなりその時の革新的な考え方。それをやっぱり、もっとクローズアップしてみたらもっと面白いんじゃないかと。



葛貫壮四郎さん (茨城県ひたちなか市)

この指止まれで協働学習を

やはり自分が興味を持ったものを何かやりたいと手を挙げてですね。それに来るっているのが一番いいですね。一番最初に「勘十郎堀」。「じゃあやろうじゃないか」ということで盛り上がりましたよね。ああいう感じで誰かがやってみようという、パッとこう集まると。興味が皆違うんですね。いいんじゃないかなと思っています。

協働学習「石岡のおまつり」

その後はL3ネットでは「石岡のおまつり」ですね。あれも非常によかったですね。私も初めてですね、石岡のまつりにいって、ああ、こんなに凄いだってということで。

わが町再発見プロジェクト～茨城県ひたちなか市～



「わが町再発見プロジェクト」は、勝田商工会議所（現在はひたちなか商工会議所）の公募型「まちおこし事業」に採択されたプロジェクト。コミュニティ学習の支援のため、葛貫さんがPushCornサーバを立ち上げて支援した。探検隊員を募り、各自がひたちなかの歴史などを探訪したり、イベントなどを取材して地域学習を情報発信に活かす協働学習に取り組んだ。



ひたちなか商工会議所振興部商工振興課
係長 中井川由治さん

中井川由治さん

(ひたちなか商工会議所振興部商工振興課係長)

まちづくり事業の狙い

これは提案公募型の一応事業という事で。従来ですと、行政あるいはあの商工会議所の方が主体となりまして事業を実施してきたという事になりなんですけども。少数のグループがですね地域の資源とか、あと皆さんのアイデアを活用して事業をする場合に、助成をしまして、町おこしの推進を図っていくといった事業になっております。



IT-DOCTOR CORPORATION代表取締役
葛貫壮四郎さん
(わが町再発見プロジェクトリーダー)

葛貫壮四郎さん (IT-DOCTOR CORPORATION 代表取締役、わが町再発見プロジェクトリーダー)

わが町再発見プロジェクトの狙い

ブロードバンドが非常に普及したということで、IT環境も非常に改善したという事ですが、実際に市民からの情報発信というのが非常に少ないというのが現実だという事。これからは、コミュニティで学習しようということとをどんどんやっつけていかないとだめだろうと。そのためにはITを活用して、情報を発信して、地域の活性化を図ろうという話で、「わが町再発見」というタイトルつけました。



NPO法人コミュニティNETひたち
村山典男さん

村山典男さん (NPO法人コミュニティNETひたち)

インプットするよりITベースで発信する学びを

私なんかもそうなんですけど。要は、学習というんで、暇になったんで学習を受けたんですが。要は、学習するだけではあんまり意味が無いと思うんですね。学習して年を取ってインプットしてみても社会貢献あんまりないから。むしろ長い経験積んできたものを活かして、学ぶよりも出す方に力を入れるべきじゃないかな。そういう意味で、もっともっとITをベースにして、ベースを持ち上げてたいなあと、そういう気持ちを持ってるんですけどもね。



樋之口英嗣さん（ひたちなか市議会議員）

インターネットという地域発信のメディアに注目

僕のスタンスは基本的にひたちなかのコンテンツをいかに、どんなメディアに載せていこうかという事を考えて。たまたま葛貫さんのこういうIT関係があるという事。

ひたちなかのソースを何に載せていこうかという事を常に思っ
てまして。ですから、こういうふうなメディアを重要視したいと
いうふうに思ってるんです。



宮田貞夫さん（ハンブティビジネスコンサルティング代表）

カツコンペ、イベントに適した情報の記録

「カツコンペ」自身は、勝田地区の宣伝のために、「カツ」をと
にかく中心に活性化というような事なんです。みなさんでカツ
コンペに参加して、カツを作る事を競いましょう、おいしいカツ
を作りましょうという事だったんですが、そこを今回のPushCorn
という技術で動画を配信することによってですね。イベントなど
を配信する方法として、非常に面白い技術だなと思ったんですよ
ね。切り口がきちっと
パパパパパとなって説
明がついて、クリッ

クすればそこを見れると。臨場感もあるということで。ということで、参
加者も非常に、特に入賞者あたりはですね、皆さんにアドレスを配ってで
すね、「見て見て」というふうな感じで。皆さんに、ぱっとそれを見る
と一瞬の内にイベントの全体がこう分かります。ということで、こういうイ
ベントの宣伝にはPushCornの形式というのが非常にいいんじゃないかな。

いかに皆さんに楽しんでいただくかが企画の鍵

皆さんに楽しんで頂くとか、見る人に楽しんで頂くとか、それからイ
ベント参加者に楽しんで頂くとか。それをいかにPRしていくか、いかに体
験して頂くのが鍵かなあと思います。私も、PushCornという言葉聞いたときは、何なのだろうと思ったんですけど、
実際やってみるとこれって意外と面白いじゃないと、使えるじゃないと、それと知ってる人も出てるなあと。こうい
うのをうまく楽しみというか、面白さというのを、どうやってPRしていくかというのが鍵かなあと思います。



園部久一さん（ひたちなか商工会議所振興部部长）

今後は一般にいかに広げるかが課題

グループとしてですね、町おこし、産業起こしとしてやる気のある方。そういう組織をつくってくれた事に対しては非常に評価
してます。なかなか行政、会議所でやろうという事ですとおざな
りのですね、行動しか出来ませんけれども。自分たちでやろうと
すると、色んな人脈を使ってですね一つの事業を成り立っていか
せるという事で非常によかったのかなと思っております。

一般市民の方に、どう広報して、活用してもらおうかだろうとい
うことですね。それをいかにPRしていくかという事が、今後大
事になってくるんじゃないかなと思ってます。

東根インターネットクラブ



東根インターネットクラブ
会長 伊勢博さん

伊勢博さん

(東根インターネットクラブ会長)

東根インターネットクラブは2001年9月にスタートした。メーリングリスト、メルマガ、ホームページなどで情報交換、情報発信をしたり、オフ会で学習、交流を進めている。

会に参加すると交流が生まれ、メンバーが呼びかけるとそれが新たな活動につながる。「そば食べ歩き」もその一つ。

パソコンを学ぼうということだけでは、長続きしない会が多い。パソコン、インターネットを共通項にして、人の輪、情報発信の面白さを共有していくと、持続性のある、eコミュニティになっていくという好例である。



日本一の大ケヤキ
山形県東根市

仕事で20年ぐらいですね、実家を離れていたんですが、ユーターンということで20年ぶりぐらいに実家に戻ってきました。そこで私が最初に直面した問題というのが、いかに地元の方とですね、おつきあいするかと、いう部分で地元のいろんな方とおつきあいをしたいと思っていて、まず最初にメーリングリストを市内で立ち上げて、そこでいろんな方とネット上のいろんな意見交換をさせていただきました。

そうしているうちに、メーリングリストのメンバーがですね。クラブを作って皆で直接交流しあうような組織になってもいいんじゃないかなというご意見をいただきまして、それから「東根インターネットクラブ」というのを立ち上げました。

皆でお互いにパソコンをですね。わからないところを教えあおうというような勉強会をやったらどうかということで、勉強会をずっとやってきました。

結構、ですね。パソコン慣れてる方でもですね。よく知らないところが結構あるんですよ、ファンクションとかショートカットとか、いろんな操作があるわけですが、それがやっぱり自分一人だとわからない世界で、それがたまたま隣の人のパソコンの操作を見てたら、「あれ、今の何か面白そうだね」ということで、「それどうやるんですか?」というようなところから教えていただくというところの積み上げが自分のITの基礎、知識づくりになっていくと思うんですね。

自分自身ですね。パソコンを最初に求めてどうやって覚えたかという、自分のことを振り返りますと、やはり周りの人に聞いたんですね。それがやっぱり一番早道だったわけです。そういうところをですね。皆さんには是非実践していただいて、わからないところはわかる人に聞くと。皆が先生になって、わからないところは教えあうというようなことで、勉強会をやっておりますね。

その勉強会で、パソコン以外の話もいっぱい出てきてましてですね。やはり地元に住んでいる方が殆どですので、いろんな話が出てきて、そんな中からまた新たなグループが誕生したりしてですね。そういう意味では我々のクラブというのは、一つの社交の場になっているのかなと思いますね。

クラブの中で得られたパソコンの知識とかですね。またいろんな人脈もできたと思います。そういうところを是非会員の方にうまく活用していただいて、本来の皆さんの活動をさらにですね。リーダー的な存在と、できればなっていただいて、活躍していただきたいと思うんですね。



山形県新庄市 FM FLOWER



田中玲さん

(FM FLOWER 会長)

商店街の半径 200 メートル界隈にしか届かないミニ FM が、全国に向けた情報発信拠点になる。インターネット時代ならではの発想の転換。空き店舗の空間がまちづくりの活動を育み、情報発信を縦横無尽に楽しむ集団がついに現れた。

インターネットに配信する番組(ビデオ)もアイデアが横溢してアイテムが増え続けている。

自前で会の運営を成り立たせている点も注目に値する。意欲やアイデアが豊かな価値を創造していく。

(聞き手：前川道博)

田中 FM フラワーの会長の田中です。FM フラワーは山形県新庄市の中心市街地にありました空き店舗を使って 2003 年の 1 月 6 日に開局した住民参加型のコミュニティです。子育ての番組ですとか、音楽番組やスポーツ番組など様々なジャンルの番組を中心市街地を中心に毎日 12 時から 20 時まで放送しています。ミニ FM ですの、スタジオから半径、約 200 ~ 300 メートルくらいしか電波の提供エリアがありませんので、もっと多くの方に情報をお届けしようということでその年の 9 月 12 日から今度はインターネットを使って動画配信をスタートしました。そちらは「Web フラワー」と呼んでいます。

企画とか何をしたい。こういうふうにはできないかと考えることのほうがよっぽど人間の知恵というか、それをあくまでもサポートするのが情報技術というものだと思うので。

特定のツールを使わずに、みんなの書き込みできる CGI を使って更新情報とか、PushCorn を使って放送っていうのも動画の放送にはうってつけのインフラだなと思って今利用させていただいてまして。

---- 全国にいる新庄の人たち？ そういうネットワークなどについても考えているわけですよね？

田中 そうですね。今度情報番組もインターネット版で放送するんですよ。それなんかは遠方で暮らしている新庄出身の人が見てくれると、「うちの隣で があったんだ」とか。極端なんですけど。「うちの町内で をするんだ」などというのを遠くで暮らされている方が見たり、今度もうすぐお盆ですけども、お盆の前に新庄に帰ろうかなというときに見てくれたりすると、「じゃあ、俺が帰る頃にはこういうことをやるんだ」などというのが伝わりますよね。なので、離れている新庄の人たちとかを取り込んで、このコミュニティにパーチャルな形で参加していただくとかですね。情報を見てもらったり、逆にそれを何かをもらうとかですね、そういうつながりがもしかしたら将来的にはできてくるかもしれない。まあ、使いようでかなりいろいろなことができるというふうには思ってます。



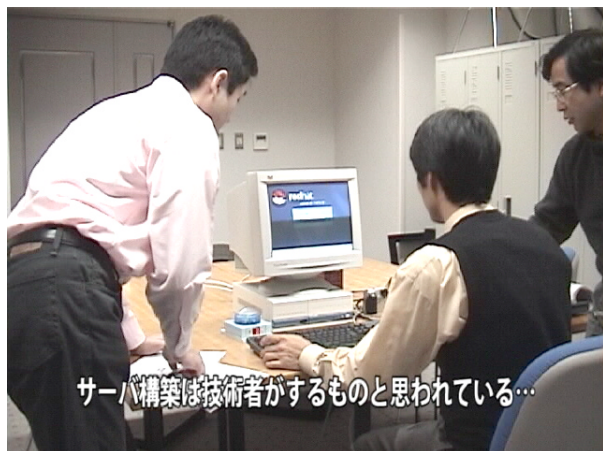
---- 最初、FM フラワーをみんなではじめようと呼びかけ始めたんですよね？

田中 そうですね。

---- 実際にここで活動しているっていうことは、いろんなことを多分皆さん学ばれているんだと思うんですよ。地域の情報、どう出していけばいいんだろうとか。どういうのがあるんだろうとか。皆でやる中で、こういろいろあったりすると思うんですよね。

田中 FM 放送というのはそれが全ての最終目標ではなくて、これをやることによっていろいろな人と知り合ったり付き合いができたりのつながりがあるって輪が広がって行って大きくなっていく。人と人とのつながりを作っていく手段のひとつであると。それが僕らはたまたま FM だったということだと思います。

サーバとeコミュニティ ~やまがたネット~



学習者が意識しにくいものの一つがサーバ運用。サーバは技術的な知識を要求されるために難しいと思われてきた。実はサーバが「協働学習」で楽しく学べることを発見したのは大きな収穫。「やまがたネット」のように、サーバ運用を支えるメンバーがいると皆がその恩恵を受け、eコミュニティの地域貢献が進む。

(フリートーク出演)

前川道博(東北芸術工科大学専任講師)

本間俊光さん(山形県山形市)

伊藤隆善さん(東北芸術工科大学前川研究室)

堀清人さん(やまがたネット代表)



東北芸術工科大学
専任講師 前川道博

前川 パソコンが使えるようになる。じゃあ、次は何ができるかというと、実はサーバを作ることもできなくはないんですね。それも技術的な壁が立ちはだかっていてできないのかということではない。

本間 皆で一緒にサーバを作りましょうというような呼びかけをして、3時間ぐらい皆でわあわあやって途中いろいろありましたけれども、何やかんややっているうちにとりあえずサーバが動いたんですね。そのサーバというのは、コンピュータは、自分が部品買ってきて組み立てたコンピュータで、ソフトは何も入っていないコンピュータだったんですね。それはお金がかかっているんですが、中に入れたソフトっていうのは、Linuxというオープンソースで開発されたソフトで、その時には学校の先生方をお二人お招きして予備知識何もないところからインストールしたらどんな按配になるかということで、それもちょっと実験的に試させていただいたんですね。



山形県山形市
本間俊光さん

伊藤さんに脇からアドバイスいただくと、かなり頻繁にアドバイスをいただくようになったわけですが、そのやりとりの中で結構、お互いに学ぶところがあつたんじゃないかと思うんですが、伊藤さんはその辺、実際にその場でアドバイスを与える立場となつてどういう感じでしたか。



東北芸術工科大学前川研究室
伊藤隆善さん

伊藤 そうですね。こういうところで、まさかこういうところでつまづくとは思わなかったというところでつまづかれるっていうことがありましたので。それ以前にインストール用のマニュアルというのを作ったんですけど、どこでつまづくのかっていうことを書いていけば、よりよかつたんじゃないかと思って、新しいマニュアルの参考になりました。



やまがたネット
代表 堀清人さん

本間 それからその後のメンテにしても、いろんな情報がネット上にありますから、そこで調べてかなりなところまでできると。

前川 サーバを作って運用するっていうのは、全く縁がないものでもなくて、難しいものでもなくて、やはり「興味」というものがあると、それが一つの学ぶ対象にもなるし、面白さにもなっていくということなんだなあ、ということメッセージとして受け取りましたね。

堀 人のつながりということで「やまがたネット」は進んできましたし、今後はPushCornというものの維持管理というものを含みまして、サービスの提供ということを組織化して、それに対処していかなければと思っています。それからいろいろな方々と一緒に活動することによって、この広がった輪をさらに大きく、そして根付くような形に進めていきたいと思っています。

生涯学習政策に届けたい声



いばらきL3ネットの皆さんに生涯学習についてのご意見をお聞きした。茨城県水戸生涯学習センターで情報ボランティアをされている方もいる。高齢層の生き甲斐づくりの支援にITが役立つこと、また、自らの表現に手軽にホームページを作れる支援策の提供が求められることがわかった。

高齢者がネット活用の支援をあまり受けていない現実、公民館に眠るパソコンの問題の指摘もあった。

生涯学習の情報提供が魅力あるものになるように、まずは市町村の職員が自ら楽しめる、情報発信の工夫も生涯学習の推進策になるとの提案もあった。



茨城県石岡市
山口文夫さん

山口文夫さん（茨城県石岡市）

H Pを作りたい：高齢者のニーズ

e-idobataというのは、おもにこのIT技術を使って文字通り井戸端会議で、自由にいろんなことを言おうということなんですけれども。意外と皆さん、自分でホームページを作りたいというような方がけっこう多かったんですね。で、アンケートの用紙に書いてないような事をあとで個別に聞くと、特にその比率が高いというので、なんとか簡単に自分の考えをまとめて外に発表できるものがあればいいなというようなことをまずは思っていました。



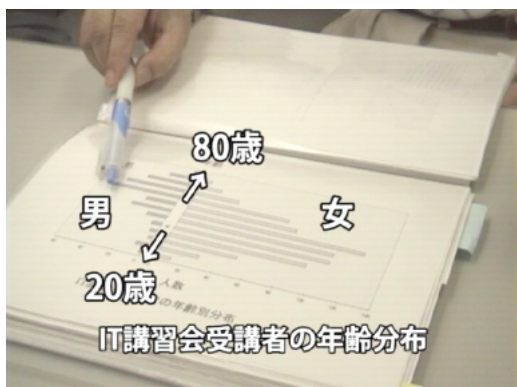
茨城県千代田町
野中寿夫さん

野中寿夫さん（茨城県千代田町）

高齢者のためのネット活用

（「IT講習会受講者の年齢別分布」グラフを見ながら）高齢者、こちら側（80歳の側）のエリアですね。これ当然意味がある訳ですね、男の場合には会社につとめていますからだいたいこの辺でどこかの組織、仕事や何かでコンピュータを使っていますね（若中年層）。この辺（60歳ぐらい）から定年退職などをやってだんだん高齢者減っていく訳ですけども。

女性の場合には、もちろんこの辺（高齢層）が完全に欠けてる訳です。この辺の年齢層というのはそんなに減っている訳ではないんですよ。ということはこの辺までは潜在的に抜けていると。そういう層をどうするの？というのが一つある訳ですよ。だから情報弱者含めてね、そういうことをやっていかないといけない。そのためには、やっぱりネットワークをうまく使って日頃からいろいろな支援体制ができないとたまたまではないかな。使えない人は永久に使えないんです。だから、こういうものに参加したくても参加する事ができない。ではどうすればいいか。



公民館に眠るパソコンの活用策

野中 当時いろんなパソコンがたくさん配布されたんですね、自治体に。ところが、自治体のパソコン今どうなっているかと言うと、時々講習会で使う。ところがあとは、全部どこかの倉庫にしまって、パソコンの役目をしていないですね、ただの箱になっている。もったいないですね。ある市の話だと、7つぐらい公民館があると言う話で、そこに20台くらい配布されていると、100何台あるはずなんですね。

だったらそれをインターネットにを使って常設できるようにできませんかとくるんだけど、みんな、公民館は「担当じゃありません」と。それで講習会がWordが何時間、Excelが何時間、とかそういう話ばかりしかない。だから、それをやるには自由に皆さんが使えて、しかも、こういう一番講習会をやるとき問題があるのは、必ずトラブルがあるんですよ。質問も受けますけどね。それにたいして対応できないと実際には自分でやれないんですよ。



高中陽一さん（茨城県ひたちなか市）

グループ活動を記録しよう

今まで例えば、深山会という山登りなんですが、ある程度毎年歩みという事で、みなさんにこれ一年間のやつということで毎年配布するわけですよ。ありがとうございますと、「皆ね、こんな所いきました」ということでいい記念になっているわけです。それから絵の方も、例えばパステルのどここの展覧会でやりましたと。これは毎年毎年蓄積されていく。その時もこれを拡大したやつを貼りつけたりしております。

で、ポートフォリオというのかな。一つの記録ということで、これをPushCornあたりで写真、これからなんとか時々動画あたりをですね。これからのやつは撮りながら一つの記録として。それ

で、こういうあれで見ればパソコンにつながるよ、とかね。ない人にとっては持ってきてみせてあげる。そういう形で続けていけばね、よい記録となるし、発展できるんじゃないかという気がしているわけです。

地元から発信できる支援策

我々だけでやってもですね、とにかく発信元がしっかりしたとこじゃないと困る訳ですね。4月からですね「茨城の生涯学習」（茨城県水戸生涯学習センター）。県関係のすべての人、学校関係、公民館、あらゆる講座。全部その中に入力するという教育を長い間かけて一通り終わったんですよ。

私がそこで気がついたのは、単なる講座いついっつかという連絡くらのあれなんですね。そうすると公民館関係者あたりがPushCornをマスターしていただいてね、自分の地元のこういうことをやったよと。写真とか動画をね、その場でホームページのアドレスを入れるだけだね。「ああこういうのを実際やっているんだ」と。今は本当に色気がないんですよ。悪いけど単なる字列ですから。

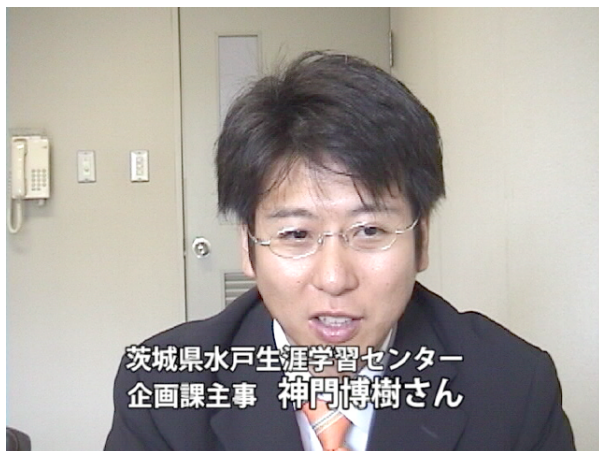
そこで、県の関係者をですね。定期的にちゃんとして、その辺を教育して、やっぱりそこまでやらないとね。今の時点ではPushCornを学んでいただいて、公民館の情報を地元の情報を、「茨城の生涯学習」というすべての情報を網羅する。形ができたんですから、継続して広めていただければ。公民館というのは本当に地元に着いた形でね、公民館の活動いかんによってね。かなり末広がりといいますかね、拡大していくんじゃないかと。ぜひこれをなんとか進めていただきたいなと。

茨城県のすべてのいろんな行事とかなんかのあれというのは、「茨城の生涯学習」のできたのあれしかないと思うんですよ、今のところね。それぞれの市町村の担当者が、これをマスターしていただいて、それを載せてやる事が一番大事だ。ほとんどそれ以外ないなあ。

山口 やっぱりあれは神門さんたち作った側だけでなくでね。僕らも育てていくというような気持ちで協力していく方がいいですね。色気が確かにないからそれをこう育てていきたいですね。



茨城の生涯学習情報提供 ~ 茨城県水戸生涯学習センター ~



神門博樹さん

(茨城県水戸生涯学習センター企画課主事)

茨城県は、県内の市町村からインターネットで直接情報を提供できる新しいシステムの運用を始めた。その推進役が神門さん。市町村向けの研修を終えたばかり。どうすれば、情報発信が豊かになるか。講座の企画に当たっては、市民との協働も念頭に置かれてよい。市町村の職員が生き生きと情報発信できる支援策もあると、茨城県の生涯学習はさらにパワーアップするに違いない。「eポートフォリオ学習」「協働学習」の期待値についてもお話をうかがった。

茨城の生涯学習情報提供

---- 生涯学習の情報提供システム。これは4月から導入、その辺の状況はどうなっていますか。

神門 そうですね、まだ開きまして3ヶ月という事で、コンテンツが正直な話充実しておりませんで、そのコンテンツの入力について各施設、各市町村にお願いしているところです。

市民と協働で企画運営

---- 県民の方の力、NPOとかそういった力をうまく活かして生涯学習を支援していくと、新しいやり方に踏み出していくと...。その辺の可能性というか、なにか今お考えになる事は何かありますか？

神門 そうですね、まず情報ボランティアという組織がありまして、まあかなりの技術を持った方いらっしゃいますので、その方々にお声掛けしてなんとかやっていきたいなと思いました。今お話し聞かして。

---- 企画とか運営とか、もっと中核にも関わっていただくと、もっと大きな力になって頂けそうな気がしますね。その辺はいかがでしょうか？

神門 そうですね、言われた通りで、これまではこちらがまた主導でやってきたものですから、逆に知識技術持ってる方が沢山いらっしゃいますので、その方々が中核に入っていてやっていきたいと思えます。

---- その自分のテーマを持って興味を持って一生涯かけてそこに蓄積していくという(eポートフォリオによる)学び方についてはどう思われますか？

神門 なかなかそういったツールが今まで無かったので、私自身もやってみたいなと思いました。

---- そうすると長続き、何でも放り込める、趣味でも何でも一緒にたです、そういう学び方です。

協働学習企画を学ぶ機会

---- こういう学び方、学習の場の提供というのがなかなか分からないと思うので、市町村とかの社会教育担当されている方の中で学んでいただくというのが一つ要るとは思っているんですね。その一方で、やっぱりその一般の方にも広くこう学習する機会があるといいので、だからそのPushCornも道具になるような気がするんですね。これワークショップでどっかで開くという形があるといいのかなもしれないなあと思えますね。

神門 今まで無かった試みなので、期待できると思います。



地域からの発信を豊かに ～ 山形県生涯学習センター～



石沢治雄さん

(山形県生涯学習センター学習振興課長)

「第3次山形県生涯学習振興計画」では、「県民主体の学習の推進」が謳われている。これをまさにどう推進するかへの答の一つが、「eポートフォリオ学習」「協働学習」である。現状では、県内の生涯学習情報提供は山形県生涯学習センターが取りまとめ一方的に提供する段階に留まっている。今後、インターネットを活用して、市町村主体の分散型発信へ、さらに学習グループや個人主体の面的な分散へと学習＝発信が広がっていくことが期待される。

石沢 県民の方々が自主的にやる生涯学習活動。これに対していかに我々が支援していけるのか。どんなふうな形で連携していけるのかっていうところを探っていく。そのところが大きな課題になってるわけですね。

---- 市町村から担当の方が義務感でなく、もっと学習情報の提供に関しても、もっと生き生きできると...

石沢 まあ、自分のところのPRなどもかねてね。

---- そうですね。

石沢 たとえばお祭り情報という、ただ単にいつどこそこで、何月何日こういうのやりますよっていう文書だけじゃなくて、映像だとか、本当に楽しんでいる皆の表情だとか、そんなもの入れながら、PRも兼ねながらそういう情報提供をするとなんてなると結構力も入るかもわかんないですね。

県で作りました生涯学習振興計画の中でも、県民の力でそういったものを作り上げていく。そして県民自らが他の方々に対してね、学習機会を提供していくんだってことを言っておりますから。そういうふうなことで講座っていいですか。そういうふうなものの中に県民に直接参画していただく。参加をしていただくっていう点からしますとね。そういう方法とはより望ましいのかな。(略)そういう意味で気軽にこちらからの求めに応じているんな情報。あるいは自分の企画とか。そういったものを出していただけるような、そんなふうなことが、ネットの中でやりとりできるのであれば、もっともっと広く県民の参画っていうのが実現されてくるような気がしますけどもね。

現在の形としては一方的にこちらがこういうような体裁で、ある程度定形化した、そういう求め方しかしていないんで。むしろそれが自ら、自分のところで情報発信しているような、そういうアイデアを凝らした、そういう情報が県を通じて全県に提供できるということになれば、非常にいい情報提供になるんだろうというふうに思いますね。



